**御影堂門**

御影堂門は東本願寺の正門である。この門をくぐることは、浄土真宗の世界に入ることを意味し、門によく見られる木製の敷居がないことは、誰にでも開かれた教えであることを表している。

非公開ではあるが、門の2階には、釈迦牟尼とその弟子の阿難、そして未来仏である弥勒菩薩の像が祀られている。この組み合わせは、浄土真宗の重要な経典の一つである「無量寿経」の中の浄土と、阿弥陀仏を信仰することで衆生がその浄土に到達できるという教えを表している。

門は2階建てで、高さは約27メートルあり、屋根は御影堂と同じ入母屋造りである。現在の門は1911年に完成したもので、1864年に徳川幕府に反発した武士が京都に火を放ち、ほぼ同じ形式であった前身の門が焼失した後に建てられた。1864年の大火では東本願寺を含む京都の大部分が焼失した。